

# 英国における海岸リゾート及び栈橋に関する研究報告

(賛) 八尋 明彦 ((一財) 沿岸技術研究センター審議役) 佐々木 宏 (同 研究主幹)

角野 隆 (同 研究主幹) 古土井 光昭 (PIERS 研究会会長)

## 1. まえがき

PIERS 研究会は、英国の海岸リゾート及びその中核施設である栈橋について、①栈橋運営に維持管理に関する体制と課題、②英国における海岸リゾートの発展と栈橋建設の歴史の変遷、③重要な栈橋の歴史と現状、④今日の海岸リゾートと栈橋の果たしている役割、および⑤わが国の沿岸域における海岸リゾート形成への示唆を目的として、平成 25 年および 26 年の 2 か年にわたって英国・イングランドを中心に 37 基の栈橋とその周辺海岸を調査・研究した。本論文は、同研究会の一員である筆者が現地調査に参加し調査した英国の海岸リゾート及び栈橋について報告するとともに、同研究会が発表したわが国への提言について紹介するものである。

## 2. 英国の海岸及び栈橋の魅力

英国の海岸リゾートには、海岸線から直角に沖側に延ばされた数多くの栈橋がある。これらの栈橋は、産業革命によって英国経済が進展した 1800 年代ヴィクトリア王朝時代の海岸リゾートへの人びとの関心の高まりのなかで、英国各地に競うように建設されたものである。栈橋は海岸リゾートの象徴的施設として存在するだけでなく、今日でも多くの人びとに利用されている。図-1 に示すように全国で 100 基近くが建設されたがその後の老朽化、高波や火災などにより多くが消失した。様々な努力と経緯をへて、今なお 58 基が現存している。調査の結果、英国人の海岸リゾート及び栈橋の魅力や楽しみ方については、以下の通りである。

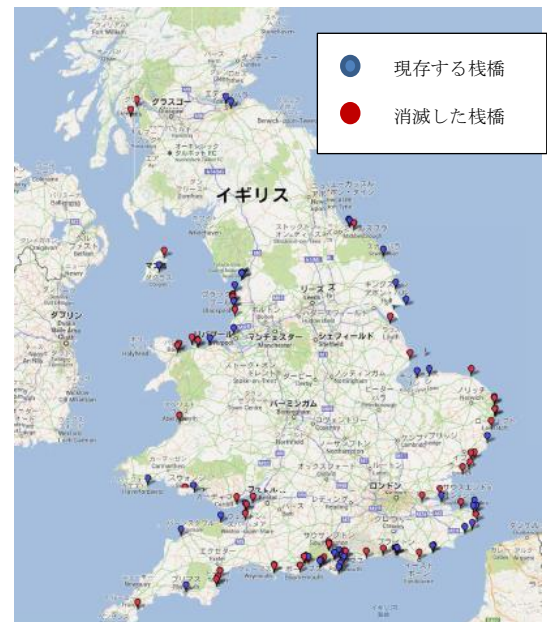


図-1 英国における栈橋の分布

**2.1 海の楽しみ方** 英国では、国民の休暇旅行の 3 割近くは海岸への旅行である。そのうち 4 割近くがイングランドの南西部の海岸に 8 泊以上滞在する海岸リゾート生活を楽しんでいる。当該地区は、安価に長期滞在を可能とする宿泊施設や設備が整っていると思われる。

**2.2 海の見せ方** 英国では、海は計画的に配置されたエスプラナード（海辺の遊歩道）を通じて水際線沿いの横の連続性を楽しむことができる。防潮堤の天端高さや遊歩道の幅、砂浜へのアクセス、ベンチ等の休憩施設などがヒューマンスケールに基づき、あくまでも快適な利用の実現を目指して計画、整備されている。

**2.3 栈橋の魅力** 英国栈橋の最大の魅力は、海岸部における親水空間の面的な広がりであり、これが海辺の街づくりの拠点装置となっている。

(1) **機能上の特徴** 栈橋は、プロムナード機能、アミューズメント機能、ソサエティ&カルチャー機能、及び船舶係留機能を単独もしくは組み合わせて有している。

(2) **構造上の特徴** 栈橋は、本体の持つデザイン性、海岸部及び背後市街地景観の演出性、自然環境との調和性、及び機能に応じた多様性を持ち備えている。

(3) **栈橋の楽しみ方** 英国人は、栈橋を当初は係留施設として利用していたが、現在は活動する場や眺める対象として楽しんでいる。さらに栈橋が周辺の親水空間を楽しむ核となっている。楽しみ方の分類として、プロムナード機能に特化した公園タイプや、来訪者がそれぞれの好みと気分に従ってアミューズメント機能やカルチャー機能を選択する遊園地（本格及び屋上）タイプがある。

**2.4 地域の主体性と個性** 英国では、自分の街を元気な地方都市としてどのように経営していくか、すべてが地元住民の意思に掛かっている。全国画一ではない地域主義とも呼ぶべき英国の都市づくりやそれらを取り巻く環境が、個性豊かな海岸リゾートの形成に繋がっている。

**2.5 自己責任の精神** 英国では、個人主義に根差した自己責任が強く求められている。このため海を楽しむための安全の確保においては、自助及び共助の精神が徹底されている。さらに栈橋の保存においては、公的な援助のみに頼らず地元のボランティア活動に拠っている場合が多い。

### 3. 我が国への提言

#### 3.1 提言に至る基本認識

我が国は四囲環海で、四季折々、津々浦々、変化に富む海に恵まれている。さらに、日本人には海を身近な存在として親しむと同時に、あるいは神聖な自然界のシンボルとして畏敬してきた独特の文化もある。日本三景に代表されるように海の景観を積極的に活かしながら、それぞれの地域は個性に富む海との交流を重ねてきた。しかしながら、近代化の中で人口や産業が集積した背後地域を抱える都市の海岸では、高潮・高波、津波などの自然災害から人命や財産を守るため防災重視の整備が行われてきた。2011年の東日本大震災後の復旧や発生が予想されている南海トラフ地震・津波への対策は、その傾向をさらに助長しつつある。このため、2か年にわたって調査した英国における海岸や栈橋に比べ、我が国の都市の海岸は、高潮や海岸侵食などの自然災害への防護を重視するあまり、残念ながら海の持つ魅力を人々が気軽に楽しむ豊かな生活の場と呼ぶには程遠い状況にある。例えば我が国では、防潮堤の天端高さが背後地盤よりはるかに高く、海や砂浜へのアプローチが容易でないだけでなく、海岸線沿いの横の繋がりや沖合方向の奥行きに乏しく、海辺で幅広い利用を可能とする整備が遅れている。また利用者の安全確保を期すあまり、利用上の制約を過度に課す傾向も否めない。

このように同じ島国である英国に比べて多くの課題を有するものの、それだけ我が国の海岸には、まだ日本人も体験したことのない未開拓な魅力が残っている。この優れた日本の海岸ポテンシャルを活かして、成熟した日本にふさわしい海岸の創出に向けて本格的な取り組みを直ちに始動するべきであると考えます。

#### 3.2 提言1：海上プロムナード空間の創出 / 海の楽しみ方の新機軸“魔法の杖 栈橋”の導入

以下に示すクレブドン栈橋入口の壁に掲示されていた資料（1890年頃）は、栈橋の魅力が高く評している。「初期の頃の栈橋は係留施設として作られたが、人々はすぐにそれが遊歩機能を有するものであることを発見した。栈橋は、自然と観光客が集まる場となった。」「人々は船酔いをする事なく、”澄んだ海の空気”を吸うことができる栈橋に引き込まれて行った。」

“Early piers were designed to be functional landing places, but the public soon discovered their potential for pleasurable promenading. Piers became tourist attractions in their own right.” “A favourite promenade with visitors – they can derive all the advantages of the pure sea air without any risk of the dreaded nausea so often induced by being tossed upon its wavy surface- 1890 Visitors’ Guide-”

このように当時栈橋は、写真-1 に示すように英国人にセンセーショナルな空間を創出し、プロムナード機能、アミューズメント機能、ソサエティ&カルチャー機能、及び船舶係留機能を単独もしくは幾つか組み合わせて、海の楽しみ方の新機軸として全国に展開していった。



スワネージ栈橋



ワーシング栈橋

写真-1 栈橋によって創出された海上プロムナード空間

これまでの日本人の海の楽しみ方は、船に乗って沖に出る以外は、海岸で泳いだり海を眺めることが中心であった。英国の栈橋は、海上プロムナード空間へ人々を誘った。四季を通じた海の楽しみ方の新機軸として、我が国の海岸にも栈橋を本格導入できないだろうか。海岸線から一本の栈橋を突き出すことで、既存の親水空間の構造が一気に面的な広がりを獲得し、そこでの活動が桁違いに多様化し、空間の質を一変させることができる。栈橋は、構造上橋脚と桁からなるコンパクトな構造物でありながら、



写真-2 栈橋の景観美

左：当時の吊り橋型のブライトン栈橋

右：曲線美の橋脚のクレブドン栈橋

海上にプロムナード空間を創出できる装置であるとともに、それ自体に写真-2 に示すようにデザイン性やシンボル性がある。また本来の機能である係留が可能であり、さらに海岸性状や水質環境に及ぼす影響も少ない。比較的成本を安くでき、また写真-3 に示すように既存の空間に容易に設置でき、さらに設置後も平面的に立体的に拡張や縮小、取り外しも容易な多様性のある構造物である。今後の研究課題ではあるが、設計上の工夫次第では耐震性、耐津波性に富む構造物とすることができ、発災後の復旧物資の係留施設として活用も期待できる。実現にあたって、既存の親水空間の特色や地域の期待は千差万別であり、それぞれのケースにあわせて、様々な栈橋の形態（公園タイプや遊園地タイプ等）があり得るだろう。栈橋及び関連施設の整備は、海岸保全事業や港湾整備事業など既存の公共事業が重要な役割を果たす。栈橋建設後の運営は公有民営、上下分離が望ましく民間の事業との連携、協働化を積極的に進める必要がある。また栈橋利用者の安全については、最小限の施設整備や管理を前提としつつも、基本的には自己責任とすべきである。

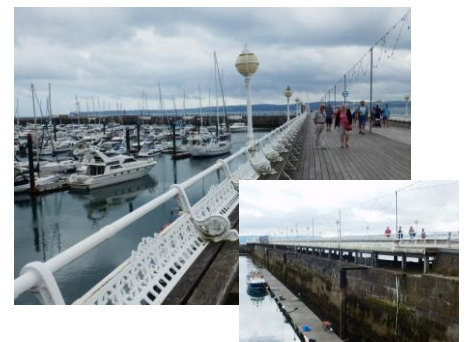


写真-3 マリーナの既設防波堤上に設置されたトーキー・プリンセス栈橋

### 3.3 提言 2：海岸線の日本型エスプラナード化 /海を豊かな生活の場とするための防護機能と利用機能の融合

我が国の海岸線の延長は3万5,000kmあり、特に都市の海岸は過去に高潮・高波、津波、海岸侵食などの多くの災害を受け、これまでの海岸整備はこれらの災害から人と財産を防護することを最優先として取り組んできた。英国の海岸線は、高潮や海岸侵食への防護を配慮しつつも、写真-4や図-2に示すように人々が海を楽しむためのエスプラナード（海辺の遊歩道）が必ず整備されており、図-3に示すようにその帯状の空間を通じて海を眺めながら散策したり、休憩したりしている。我が国の海岸も、自然の脅威への対応が必要不可欠であるものの、もっと人々が海と向き合える、海を楽しめる空間に変えていく、日本型エスプラナードを整備してはどうであろうか。海の脅威に備えながら、我が国が有する地域の掛け替えのない資源・資産である海の美しさや豊かさを楽しむというライフスタイルは日本人の生活の質を変える可能性を持っている。このため、我が国の現在の海岸線を高潮・高波、津波対策のための防護機能と海を眺め海辺で憩い楽しむ利用機能とを巧みに融合させた空間に変革すべきである。ちなみに、エスプラナードの語源をたどると、写真-5に示すように攻撃する敵を砲撃しやすくするために設けられた要塞の前の空地(赤丸内)を指す。つまり、守りの空間を意味する。従って、海岸のエスプラナードとは、具体的には既に設定されている防潮堤、防波堤、護岸等によって防護ラインの堤内側を防護しつつ、それに「歩き眺める」という遊歩道や休憩施設等を有する利用機能を付加するものであると推察される。

エスプラナードを整備するにあたっては、人々の視線と動線を十分に考慮した背後街路ネットワークとの一体化が不可欠である。徒歩で市街地からスタートして海岸部に向かうルート、また海岸に沿って海を楽しむルートを確認する必要がある。当然ながら、ルートの途中には休憩の場が必要である。それがベンチであ



写真-4 必ず整備されているエスプラナード  
上：ウェスト・スーパー・メア・グランド棧橋  
周辺の海岸  
下：テインマス棧橋周辺の海岸



図-2 エスプラナードを配置した海岸線の例  
(棧橋築造前1906年のバーナム・オン・シー海岸)

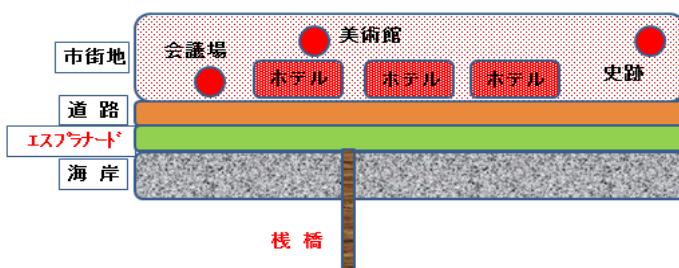


図-3 英国の海岸リゾート地における基本配置

- ◇「エスプラナード」は、海岸沿いの「ポイント」（遊歩道）
  - ・海岸に一番近く配置され、車道はその市街地側に整備
  - ・幅広くゆったりと整備され、さまざまな活動の場を提供
  - ・荒天時の遊水空間
- ◇「棧橋」は、海に突き出す「ポイント」（遊歩道）
  - ・「棧橋」は視覚的、活動的にも、海岸リゾートの中心的な存在
  - ・海岸リゾートを海上から見返すユニークの視点場を創出

ったりレストランであったり、さらにはミュージアム、ショッピングやイベント会場であったりする。さらに付加的な効用としては、この「歩き眺める」ルートが、高潮・高波や津波の非常時の「避難」ルートともなり得る。実現に向けては、既設の防護施設の沈下や老朽化などにより修繕、補強を進めるに際しては、既存施設の形状の変更や栈橋を付加するなどエスプラナード化を計画し工夫をこらした設計を強力に進める。また同様に防波堤や防潮堤等を新設する際には、海辺の街のエスプラナードの一角を形成することを目指して、新たな形状や構造の導入に積極的に取り組む必要がある。



写真-5 要塞の前の空地・エスプラナード

### 3.4 提言3: 海辺の観光地から海辺の休養地づくりへ / 地方創生“元気な海辺の町づくり”

昨今の我が国の地方都市は、英国に比べて人口規模は同程度かそれ以上にも関わらず、経済が低調で元気がない。先頃、国立社会保障・人口問題研究所が発表した2030年までの人口減少率が大きい都市のトップ10に、1位の小樽市（減少率24%）を筆頭に函館市、大牟田市、酒田市、釧路市、呉市、今治市の7つの港湾所在都市が並んだ。今後、このような居住人口の減少に対処するために、英国の事例に想を得た日本型の栈橋やエスプラナードを導入することをひとつの起爆剤として、海辺の持つ魅力を引き出して、交流人口を増加させる海辺の休養地づくりを積極的に進めてはどうだろうか。例えば図-4に示すような海辺の街が、栈橋やエスプラナードを活用して、これまで以上に幅広い海との触れ合いを気軽に楽しめる街に転換できれば、市民の日常生活の質が高まり、四季折々の海を様々な形で楽しむことが出来る。同時に、外来者に対しては、これまでの夏場だけの観光地づくりから年間を通した週末型や休暇型の休養地づくりへの転換を試みたら如何であろうか。海と云えば海水浴か潮干狩りに大挙して来訪し去っていく、狭く限定された活動の対象にしか海をみなさない時代に別れを告げる街づくりである。つまり週末や長期休暇の滞在型のゆったりとした海辺の街づくりである。滞在型の休養地を実現するためには、旅館や高級ホテルだけでなく安く滞在できる宿泊施設の提供が重要なインフラとなる。広がりつつある空き家を積極的に活用したりして、安価に宿泊し地元の豊かな素材を活かして自炊を楽しむことができる仕組みも検討に値する。海辺の休養地だからと云って楽しむ対象は海だけでなく、近くの史跡や丘陵歩き、スポーツや農水産作業の体験など、多彩な楽しみ方を提供できる取組みが大事である。会議場や展示場など交流の場も大きな役割を果たす。他地域から元気な高齢者が移り住む場としての海辺の街づくりと云う戦略も検討されるべきだろう。外来者が休養に来訪する一方で、今後急増する高齢者が定住する街づくり。新鮮な海産物や野菜を楽しむ、外来者を対象とする幅広い活動の場の提供は、新しい定住者である高齢者にとっても貴重なサービスとなる。現下、政府は「地方創生」を大きな政策の柱に掲



図-4 栈橋とエスプラナードが中核となった海辺の街づくり（ティンマス栈橋）

げて取り組んでおり、改正された「地域再生法」は、国の支援策を自治体側から提案できる制度が設けられ、自治体自らの知恵が求められている。自治体が策定した再生計画が認定されれば、それに関連する各省庁所管の計画も同時に認可する仕組みである。実現にあたっては、例えば図-3 に示す英国の海岸リゾート地における基本配置を参考に、日本型の栈橋やエスプラナードをパッケージとして再生計画のインフラの目玉として自治体から提案してはどうであろうか。候補地としては、全国に国土交通省に登録されている 76 港の“みなとオアシス”があろう。そのことによって、港湾都市の再生とともにみなとオアシスの魅力やステータスの向上にもつながるのではないだろうか。また、1980 年代に当時の運輸省が打ち出した「総合的な港湾空間の整備」という政策に基づいて、三大湾をはじめ全国の多くの港湾で市民のにぎわいを取り戻す再開発が行われた。しかし、その多くはいまだ点的なウォーターフロントづくりに留まっており、例えば写真-6 に示すような線的や面的な展開を見せるに至っていない。今回改めて日本型の栈橋やエスプラナードの導入によって、新たなウォーターフロントの魅力を引き出し、大きく飛躍させる良い機会にならないであろうか。実現にあたっては、地方自治体や地元企業及び住民が連携して、その地域にふさわしい機能を選択・組み合わせを検討していく必要がある。



写真-6 都市に新たな軸線をつくる栈橋  
(ブライト栈橋) 英国栈橋協会 NPS ホームページ

#### 4. あとがき

本論文をまとめるにあたっては、PIERS 研究会の監事である栢原英郎 前（公社）日本港湾協会名誉会長、同副会長である井上聡史 政策研究大学院大学教授、同理事である布施谷寛氏、および大野正人（一財）港湾空港総合技術センター審議役の多大なるご指導やご助言を得た。この場を借りて心より感謝申し上げます。

- 参考資料
- 1) PIERS 研究会、2013：英国 Piers 調査報告書 2013
  - 2) PIERS 研究会、2014：英国 Piers 調査報告書 2014
  - 3) 英国 National Piers Society ホームページ